
不思議の国の、僕とミミズと自分探し

太郎鉄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議の国の、僕とミミズと自分探し

【Nコード】

N0322B

【作者名】

太郎鉄

【あらすじ】

目が覚めると、僕は何もかもを忘れていた。何かがずれている不思議の国で、ミミズに導かれながら、僕は失った僕自身の欠片を探す旅に出る。途中、タコとイカの戦争や、教えたがりの誘惑、情欲の街の試練とか、様々なものに巻き込まれながら、少しずつ、僕は僕を取り戻していく。全ての欠片が揃った時、僕は――。

1話 ミミズ

体全体に熱を感じて、僕は目を覚ました。すると、熱の正体が太陽光である事に気付く。

僕は目を細めてから、現状の確認を始める。まずは起き上がらないといけない。

周囲を見た。オレンジ色の地表がどこまでも続いている。ここは荒野のようだ。見渡す限り、草木一本生えてない。

さて、当然の疑問が僕に芽生える。

僕は何故、こんな所にいるのだろうか？記憶を振り返ってみる。

.....？

おかしい。何も思い出せなかった。僕が誰で、どのような人生を送ってきたのか、皆目見当もつかないのだ。

「やあ、随分よく眠っていたね」

随分とかん高い声が聞こえた。声変わりをする前の子供の声。男の子なのか女の子なのかの判別がつかない。僕は周囲を見渡す。誰もいない。

「そっちじゃない。下だよ、下」

下には、一匹のミミズがいた。体の半分を僕の顔に向けて浮かせ

ている。ミミズに目があるのかは知らないけれど、僕を見つめているように見えた。

「そう。ここだよ」

「君が、喋っているの？」

「そうだけど、それが何か？」

毅然とした態度（あくまで印象）に、僕は返答に困った。

「たしか、ミミズは喋らない生き物だったよね？」

「失敬だな。ミミズが喋らないなんて、一体誰が決めたというんだい」

「一体誰が決めたんだろう？」

「喋らない生き物なんてどこの世界にもいやしないのさ」

ミミズはぴょこんと飛び跳ねて、僕の肩に乗った。

「ジャンプまで出来るんだ」

「当たり前だよ。反動というものを使えば、ジャンプくらい誰にでも出来る」

ミミズはミミズの割に、特有の粘り気というか、水気が一切感じられなかった。乾いているという訳でもなさそうだけど、とにかく、ミミズっぽい質感じゃないのだ。何というか、そう、人間の細い指

そんな感じだ。

僕はそれについて尋ねてみようか迷ったが、そんな事より、聞かなければならない事があるのでひとまず後回しにした。

「ここは、どこだろう?。」

「おお、いけない。そうだったね。それは当然のクエッションだ。少なくとも、僕がどうして喋れるのかなんていう質問より、遥かに真っ当で有効な問いだよ。」

ミミズは恐らくは頭と思われる部分を、上下に揺らした。頷いて、いるのかな?

「いいかい? 君はたった今、この世界に迷い込んできた。つまり、君が元々住んでいた世界とは別の、この世界にね。まあ、それ自体は別段珍しい事じゃない。よくあるんだ。君みたいな少年は、実によく迷い込んでくる。」

僕は早速、ミミズの話についていけなくなってしまった。

「大事なのは、ここが何処なのかという事よりも、どうしてこんな所に君が迷い込んできたのか、だ。」

それは確かにその通りだった。僕は腕を組んで考えるが、やはり何も思い出せない。

「何も思い出せないだろう? 当たり前さ。残念ながら、君はバラバラになってしまっているんだ。バラバラにならなきゃ、こんな所に迷い込む事なんて出来やしないよ。」

僕は特にバラバラになっていないので、それについては反論してみた。

「違う。体の問題じゃない。気持ちとか、心とか、精神とか、そういう類の代物がバラバラなんだよ」

「よく解らないけど、だから僕は記憶を失っているの？」

「そう。色んなものを失ってる。例えば恐怖だ。普通はね、君のような少年がこんな荒野に一人で放り出されたら、まずは怖がってしかるべきじゃないか。それがどうだい。君は驚く程冷静だ」

そう言われれば、ちつとも怖くない。

「君はこれから、この世界で、バラバラになった自分の欠片を探さなくてはならないんだよ」

ミミズの言葉は一方的で、かつ強引だった。いきなり探さなくてはならないと言われても、ミミズの言う《そういう類》の代物が、バラバラになるなんて事が本当に有り得るのかすら、僕には判断がつかないのだ。

「戸惑っているね？まずはそれでいい。とりあえずは流れに身を任せてみるんだ。大丈夫。君の欠片探しには、僕もきちんと付き合うのだから」

肩から聞こえるミミズの声は、自信に満ち溢れていた。

「でも、なんで見ず知らずの僕をわざわざ助けようとしてくれる

のさ？」

「それが僕の仕事であり、存在意義なんだよ。そんな事は君が気にする事じゃない。さあ、行こう。こんな所にいつまでもいたんじや、ミミズでなくても干からびちまう」

僕はもう一度、周囲を見渡した。行くとっても、こんな荒涼とした荒野を、僕はどちらに進めばいいんだ。

「前に進むんだよ。決まってるじゃないか。どのような事態に直面しても、前進さえ怠らなければ、物事はある程度好転するものなのさ。もちろん、時には立ち止まる事も必要だがね」

でも、今はやはり進む時だ、と、ミミズは付け加える。少なくとも、今の僕にはミミズの言うとおり、前へ進むしか方法がないようだ。

太陽の熱が容赦なく僕達を焦がし続けていく。一時間程歩いた頃、前方に寂れたホームのようなものが見えてきた。何もかもに忘れさられた、ある種の諦めのような雰囲気漂わせて、それは荒野の上にひっそりと存在していた。

僕とミミズはホームの上で列車を待つ。地面に敷かれた線路が、このホームの外界との繋がりを何とか保たせているように見えた。

「さあ、いよいよ始まるぞ。覚悟はいいね？」

「何の覚悟だい」

相変わらずミミズは僕の肩に乗っている。

「何かを探すという事は、それがどんなに些細なものだって、それなりの労力を使うんだよ。君の場合、何せ相当な数の欠片を、この世界から見つけ出さなきゃならないんだ。君が使う労力は、はっきり言って途方もなく大きい」

「それが見つかれば、僕の記憶も戻るし、元々いた場所に帰れるんだよね？」

「もちろんだとも。君が諦めない限りはね」

「解ったよ。僕はとにかく、労力というものを駆使して、何とか欠片を探し出す。道は、君が教えてくれるんだよね」

僕の問いにミミズが頷くのと、彼方から蒸気を青空に上らせて、機関車が走ってくるのが見えた。機関車がホームに停車すると、僕は四号車に乗車する。

中はなかなか快適だった。赤いソファが向かい合わせにいくつも並んでいて、座り心地も抜群にいい。しかも、客は僕達しかないのだ。

真ん中の席に僕が座ると、ミミズは肩から飛び降りて、対面の席に移動した。タイミングを合わせたように、汽笛が車内まで響いてきた。

「それで、この列車はどこに向かうの？」

「タコの街さ」

タコ？

「タコの王と僕は、古い顔馴染なんだよ。君の欠片について情報を得られるかもしれない」

ゴトゴトと音をたてて、列車が動き出した。

「うん、それで、僕は何の欠片から探せばいいのかな？」

果たしてどれ程の数の欠片があるのかは判らないけど。

「そうだね。まずはやはり、あった方が何かと便利なものから探そう」

「例えば？」

「名前、とかね」

このようにして、僕の欠片探しが始まった。

2話 タコの街

トンネルを抜けると雪国ではなくて、ただの山道だった。ただの山道とは言っても、常識からしたらやっぱりおかしい。トンネルに入る前まで、窓の外は荒れ果てた荒野だったのだ。いきなり緑豊かな山道とは、僕でなくたってあんまり納得はいかないだろう。

「さあ、もうすぐタコの街に着く。準備はいいね？」

「特に用意するものがないからね。大丈夫だよ」

列車は山道をどんどん登っていく。時折、小鳥が木々の上で羽根を休めているのが見えたので、ここにはきちんと生命の営みというものがある事を確認出来た。一安心。

「そうそう。一つ注意しておく事がある」

ソファアから、ミミズが窓に飛び移った、というか張り付いた。

「タコの街の連中は基本的には優しいし、気さくな者ばかりだ。僕に対してはもちろん、君にもある程度は友好的に接してくれるだろう。ただ…」

「ただ？」

「イカの話だけはしちゃ駄目だ。タコはイカが大嫌いなんだよ」

特に、タコに対してイカの話をするという発想が僕にはなかった。

「うん、解った。タコはイカが嫌いなんだね」

「ああ。彼らはもう長い事争い続けているからね。しかも現在、戦況はイカに分があるんだ。それで、タコは随分ピリピリしてるんだよ」

タコとイカがどのような方法で争っているのか聞いてみたいとも思ったけれど、話がややこしくなりそうだったから、やめておく。

そうこうしてる内に、列車は山道を越えて、荒野のよりは遙かにそれらしいホームにたどり着いた。少し先には（実際は随分先だけ）海が見えて、海の手前には、巨大な貝殻が規則的に並んでいる。

「あの貝殻は何？」

「タコの家だよ。そこら一体がタコの街なんだ」

ここからタコの街までは徒歩で行かなければならないらしい。僕はミミズを肩に載せて、緩い傾斜を、草木をかき分けながら降りていく。

やがて、タコの街が目前に見えた。

それから、その住人達もよく見えた。タコだった。僕の身の丈より少し大きなタコ達が、所狭しと、歩き回っている。

「なんで、タコが歩いているのかな」

「君だって歩いてるじゃないか。僕の時といい、君にはちょっと

無粋な所があるね。そういう事は聞かない方が、君の人生は上手くいくよ」

でも、僕の元々いた世界では、ミミズは喋らないし、タコは歩かない生き物だったと思う。記憶がないから断言は出来ないけど。

「真ん中に噴水が見えるだろう？その噴水の先が王の家だ。行く」

僕はタコの街を歩き始めた。そこら中のタコの視線が突き刺さる。ひそひそ話が聞こえてきた。

「やだ。あの子、足が二本しかないわよ」

「可哀想ねえ。事故にでもあったのかしら」

「イカにやられたのかもしれないわよ。イカは野蛮だから」

「最悪ねイカは」

「イカなんて、生命の屑だわ」

ミミズの言うとおり、かなりイカは憎まれているようだ。それにしても、どのタコも同じようにしか見えないのは、僕がタコじゃないからなのかな？

噴水の先にある、王冠の形をした貝殻に僕達が入る。ミミズは肩から降りて、先に話を進めてくると僕に断ると、するすると奥へ行ってしまう。

貝殻の中は、思いの他生活感に溢れていた。床にはピンクの絨毯が敷かれて、ベッドやら箆笥やら電気スタンドやらテレビやらが設置してある。奥に木製の扉があつて、そこからミミズと、もう一人の声がした。

「おお〜！ミミズの！元気にしてたかあ！」

「お陰様でこの通りだよ」

「よく来たなあ。まあゆっくりしていきなよ」

「そうしたいんだが、今日はちょっと仕事でね。合わせたい者がいるんだよ」

扉が開くと、ミミズを乗せた王冠を被ったタコが、ゆっくりと僕に近付いてくる。

「この兄ちゃんかい？なるほど、確かにバラバラだわ」

「だろう？欠片探しも楽じゃないんだ」

タコ王は、僕の周りを一周する。

「よお兄ちゃん」

「どうも、初めまして」

「聞く所と見た感じによると、バラバラだってな？」

「はい、そうらしいんです」

「で、俺らタコ族に、助けを求めにきたわけだ」

足の一本を僕の肩に乗せて、大きな頭をウンウンと揺らすタコ王。

「はい。何か、情報があれば頂きたいなって」

「おう！何でも聞けや！このミミズと俺は昔からの大親友でな！こいつがナメクジに襲われた時なんて、毎回俺が助けてやってたんだぜ」

「おいおいタコ王。その話はよしてくれ」

あははははとタコとミミズが笑っていたが、僕には何が楽しいのかさっぱりだった。

「でよ、何から探してんだ？」

「まずは、名前を」

「そうなんだ。タコ王、どこかで名前が落ちているの見なかったかい？」

タコ王は二本の足を胸と思われるあたりで組んだ。目を瞑って考えているらしい。

「何て名前だ？」

僕が覚えてない事を伝えようとすると、タコ王の頭の上から、ミ

ミズの笑い声が聞こえた。

「待ってくれよ。君ともあるうものが、名前を落とした少年に名前を尋ねるのかい？これは傑作だ」

「そうか。そついやそつだな。違えねえや！」

またまた笑い合うタコとミミズ。僕は収まるのを待っていた。

「ちょっと待ちな。確か、誰かが少し前に、名前がどうのって言ってたな。ええと、あれは……ああ、そくだ！ハチの奴だ！」

ハチ？ハチとはやつぱり蜂の事だろうか。

「よし、ハチを呼ぶぜ」

「耳を塞いだほうがいい」

深刻そうにミミズが言うので、僕はその通りにした。

「ハチイイイ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

家具が揺れた。箆筥が倒れて、電気スタンドの電球が割れる。耳を塞いでいなければ、鼓膜が完全に破れていたと思われる。

やがて、入口の方から、不機嫌そうな顔（やはり推測の域を出ない）をしたタコが、のっそりと姿を表した。頭には鉢巻を巻いている。

「なんすか、もうデカい声出して。おばさん連中失神しちゃい

ましたよ」

ガハハハハハ。もちろん笑ったのは僕じゃなくてタコ王。

「紹介するぜ。ハチだ」

「ハ郎っす！ハチはやめてくださいっていつも言ってるのにも」

「細かい事言っなハチ！お前、何日か前に、どっかで落ちてる名前見たとか言ってたよな？」

僕はタコ王とハ郎の間に挟まれている。変な気分だった。

「ああ、海岸に打ち上げられてましたね、そっいや」

タコ王の赤い顔が一気に青白くなった。

「海岸だあ？まずいじゃねえか」

「確かに、まずいね」

ミミズとタコが互いに相槌を打つ。何がどのようにまずいんだろっ？

「昨日まで嵐だったんだ。何日か前じゃ、波にさらわれた可能性が高いぜ」

海の中じゃ、僕にはどうやっても探せない。ミミズが僕の肩に移動して、囁きかけてきた。

「海はイカが支配してるんだよ。彼らタコは、イカに追い出されて地上に街を創ったんだ」

さて、どうしたものだろう。僕の欠片探しはいきなり難航し始めている。

3話 海へ

タコ王は名前を諦めた方がいいと言う。僕は、果たしてイカがどれほど恐ろしいものか理解出来なかったが、真つ赤なタコ王が青ざめているので、それはやっぱり諦めた方が懸命なんだと理解する。

「大王イカの野郎にはいつか目にも物見せてやるつもりだがよ、情けないが、今は無理だ。あいつら、俺達より足が二本も多いからな」

ミミズ曰わく、タコとイカの戦力は足の数で決まるらしい。何の事やら。

「さて、早速障害が生まれてしまったが、君はどうする？名前は諦めるかい」

「名前を諦めると、僕は元通りになれない？」

「いや、そんな事はないよ。実のところ、名前なんて大したものじゃない。別に今、君が勝手に自分を命名したって、それが新しい名前になるだけだ。もちろん、古い名前はどこかでヤキモチを焼くだろうがね」

僕は海の底に沈んでいるであろう、自分の名前の事を考えた。

「一つだけ言えるのは、君の名前は、恐らく今泣き叫んでいるだろうという事だけだね。名前というのは、持ち主から離れるとすぐに弱ってしまう生き物なんだよ。彼らは精神的に脆いんだ。何といつても、名前だけじゃ個性なんてすぐ消えてしまふんだから」

なんだか、名前がとても気の毒に思えてきた。別に、名前に罪はないのだ。それなのに、僕の知らない内に、僕から切り離されて、深く暗い海の底を漂っている。

「探せるかな、名前…」

「もちろんさ。やろうという意志がある限り、とりあえずのころ可能性という火が消える事はない」

僕はこういう、困難に直面した時に必要なものを絞ろうとしたが、それがどんなものであるかが思い出せなかったので諦めた。

「勇気さ」

ミミズが言う。

「君が絞ろうとしているのは勇気だよ。どこかに散らばった、君の欠片の一つ」

勇気。そう。確か、それは勇気というものだったはずだ。

「だけど、失ってるから絞れないよ」

ミミズは耳元で笑う。

「大丈夫。意志があれば見つかる。名前も勇気もね。幸いな事に、意志だけは君の中に残ってるんだ。当面はそれだけで凌げるはずさ。大抵の困難はね」

しかし、タコ王は言う。

「話し進んでるとこ悪いけどよ。海じゃ協力出来ないぜ」

タコ王はベッドに腰掛ける。イカに対してふてくされているようだった。

「悪いが、他を当たってくんねえか」

僕はミミズに言う。

「ねえ。どうすればいい？」

ミミズはそれには答えず、頭なのか目なのか判らない部分をタコ王に向けた。

「構わないよ。だけど、海までの案内くらいは頼めるだろう？彼も山を降りたばかりで、クタクタなんだよ」

僕は特にクタクタではなかったけど、わざわざそれについて釈明しようとも思わなかった。

「ああ。それくらいなら力になれる。おい、ハチ。お前、今日のオクトバスに決定」

足の一本を八郎に向けるタコ王。勘弁してくださいよと八郎。面倒臭そうな顔をしている。ところで、僕がタコの表情について語る全ては印象と推測に過ぎないので、実際のところはどうなんだか解らない。

「うるせえ！タコは嘘つかねんだよ基本的に。だけど現状イカの糞野郎の相手は出来ねえだろが。だから、せめて、最高の乗り心地をこいつらに堪能させてやれや」

「えゝ、だってこの前『お前の乗り心地が一番悪い』って俺に言っただの王様っすよゝ」

足をうねうねさせる八郎。僕で言うところの、もじもじしている感じ。

「だあゝ！文句ばっか言ってるたたこ焼きにするぞおめえ！」

勘弁してくださいよゝ。

僕とミミズはオクトバスという乗り物に乗っている。あるいは、僕とミミズは八郎の頭に乗っている。

「座り心地はどうすかお客様ゝ」

やる気のなさそうな声が聞こえた。実際やる気がないんだろう。素晴らしくスローペース。歩いた方が多分早い。けれど、海までの道のりは起伏の激しい峠をいくつか越えなきゃならなかった。広大な海から名前を探すという事がどれだけ手間のかかる作業かは想像出来ないけれど、それはとても体力のいる事だと思う。だから僕は歩かない。

「乗り心地は最高だよ八チ君」

僕の肩に乗っているミミズが言った。こういうのを、確か皮肉と

言っただったか。

「俺はハチじゃなくて八郎ですってば。失礼だな」

左の方で、草むらを兎が駆けていくのが見えた。

「あの兎も喋るんだよね？」

ミミズに対してとも、八郎に対してとも受け取れる風に僕は質問する。答えてくれたのは八郎。

「やだなあゝ、何言ってるんすか。兎が喋るわけないっすよ」

「この世に喋らない生物なんていないんだよね？」

僕はミミズに同意を求める。

「この世に、例外のないものもまた存在しないのさ」

なる程。このようにして僕は一つ賢くなる。

兎は例外。

四つ目の峠を越えると、ようやく海が見えてきた。山から見下ろした限りではそんなに遠くには見えなかったんだけど、外はすっかり暗くなっている。

「はい到着」

僕は砂浜に降りる。海だ。完全に海だ。広くて大きいのは大抵海だ。

「そう。広くて大きいのは大抵海なんだ。あくまで大抵だけだね」
ミミズには僕の心が読めるらしい。僕にはミミズの心が読めない
ので、少し不公平だと思った。

「君は幸せを知らないからそんな事が思えるんだよ。さあ、名前
探した」

「んじゃ、どうもした」

八郎が後ろを向いて歩き出そうとした。後ろを向いても形が変わ
らないから夜になると前だか後ろだかよく判らなかったけど。

「ハチ君。何処へ？」

いかにも不思議でたまらないといったミミズの声。

「街に帰るんすよ」

「何を言ってるんだい。名前探しはどうなった？」

僕はミミズの方が何言ってるんだいと思った。恐らく、八郎も同
意見。

「だって、あっしの仕事はお宅ら海に送り届けるだけっすよ？」
完全にその通り。

「違うよ。世の中には本音と建て前がある。タコ王はイカの手前、そんな事は言わなかったが、僕らをわざわざ君に運ばせたのには、手伝えという本音が隠されているんだ」

小さくミミズが僕に耳打ちする。あくまで、僕の解釈ではねー！。

「そんな馬鹿な。海っすよ？イカっすよ？」

「そうだよ。海にはイカがいる。イカは危険だ。侵入者に容赦しない生き物だ。だからこそ、君の助けが必要なんだ。泳ぐのは得意だろう？」

「いや、得意すけど、イカっすよ？」

「イカっすよ」

ミミズが言い返す。

「イカっすけど、君はタコっすよ。海を知ってる。少なくとも僕達よりは遥かに。だから、君の力が必要なんだ」

八郎はぶつぶつ何か小言のようなものを呟き始める。だからオクトパスは嫌だったんだ、大体王様が悪いっすよ、ああ帰って寝たい。

「もし手伝ってくれたなら、君に僕から素敵なプレゼントがあるんだが」

その言葉に引かれるように、八郎が振り向く。なんすか？

「新しい名前」

「マジすか!？」

「マジす」

「乗った!」

八郎という名前が泣いているような気がした。

僕とミミズと八郎は波打ち際に立つ。海は温かった。海は広くて大きいけど、温かいというのはどうだろうと思った。

「さて、これから名前探しを始めるよ。何か質問は？」

僕は手を上げる。どうやって探せばいい？

「潜って探すんだ。他は？」

八郎は足を上げる。アテはあるんすか？

「無い。他は？」

僕と八郎は声を揃える。

勘弁してくださいよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0322b/>

不思議の国の、僕とミミズと自分探し

2010年10月11日11時13分発行